

## 神華集団の外国進出の行方

9月にこの欄で紹介した兗州煤業股份有限公司（Yanzhou Coal Mining Company Limited）による Felix Resources の買収は、オーストラリア政府によって条件付きで承認された。ところで、その際に触れたように、石炭生産量で世界第2位にある神華集団有限責任公司（神華集団：Shenhua Group Corporation Limited）も、国内で各1億トンの生産能力を持つ2つの炭田の開発を5年以内に稼働開始の予定で進める一方、外国における石炭権益の獲得に動いている。インドネシアではすでに石炭開発事業に着手し、オーストラリアでは探査権を取得し、さらに、少なくともモンゴルとロシアで開発の交渉を進めている。

インドネシアの事業は神華集団にとって最初の外国プロジェクトである。同社が2009年7月に着手したこの事業は、70%出資の子会社によって実施され、石炭を年150万トン生産し、2基の15万KW発電機へ供給する、というものである。同社に与えられた鉱区の石炭埋蔵量は6,000万トンであり、2011年に運転を開始する予定の発電所に30年間の供給を行う。一方、神華集団はオーストラリアでは2008年11月、New South Wales州政府から Newcastle 炭田の探鉱許可を取得した。この炭田の石炭予測資源量は10億トンを超えると見られている。ただし、その後、この開発案は同国野党からの反対にあっている。それによると、神華集団がこの事業を推進すれば、いま農耕用に利用されている地下貯留層が深刻な破壊を受けるであろう。

2年ほど前、神華集団の首脳はオーストラリアとインドネシアは中国南部への石炭供給に有利な地域である、と語っている。しかし、上に見るとおり、インドネシアでは、国内向けに小規模の開発が行われているに過ぎない。

さらに、神華集団は数年前から、モンゴルの Tavan Tolgoi 炭田の開発交渉を行っている。この炭田は、残された原料炭埋蔵地としては世界でも指折りの大きな規模を持っており、Peabody、BHP Billiton などを含む約10社が交渉に名乗りを上げている。同社は、交渉に成功した暁には、この炭田から中国に至る長距離の鉄道を建設する、と声明している。また、ごく最近のこと、神華集団、その他の中国の会社がロシアのシベリアと極東における石炭開発につき交渉中であることが明らかになった。

神華集団の幹部は、同社の外国事業の経験は限られているので、国際的戦略は極めて慎重に追求していると示唆したことがある。その背景には、同社が、兗州煤業とは異なり、国内に大きな石炭埋蔵量を持っており、したがって、外国進出に慎重になりうる、という事情がある。筆者は“研究の Derivatives”欄で、現在の神華集団を中煤集団とともに、「国内事業型」企業と呼んだが、同社は今後、「多国籍国際貿易型」へ向うであろうか。

(エイジウム研究所 上席研究員 木村 徹)